

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2015年 春号

第6巻第1号 (通算16号)

2015年5月10日発行

ケベックのフランコフォニー

小松祐子

2014年度の小畑ケベック研究奨励賞をいただき、2015年2月後半から2週間にわたりケベック調査旅行という素晴らしい経験をさせていただいた。何が素晴らしいかと言えば、「ケベックのフランコフォニーに関心がある」と言えば、どなたも諸手を挙げて大歓迎してくださるのである。人々のフランコフォニーへの愛着とケベックのフランス語社会の成熟とをひしと感じる滞在となった。ここでは詳しい調査内容について報告する余裕はないため、とくに印象に残った部分に絞ってお伝えしたい。

国際的なフランコフォニー組織の発端となったニアメ会議が1970年3月20日に開かれたことから、毎年この日の前後には世界中でフランコフォニー関連行事が開催されている。ケベックでもMois de la francophonieの多彩な催しが準備されていたが、私は初日のレセプションとスペクタクルにCFA (Centre de la Francophonie des Amériques)のDesgagné代表のご好意で招待いただいた。SAIC (Secrétariat aux affaires intergouvernementales canadiennes)のFournier大臣とケベック市長のスピーチにはじまるレセプションもフランコフォニー気分を高めてくれたが、Grand ThéâtreでのスペクタクルLégendes d'un peupleには心から感動し

た。19世紀末にLouis-Honoré Fréchetteが書いた北米でのフランス系移民の歴史を扱う同名の叙事詩を、2012年から若いミュージシャングループが現代のさまざまなスタイルの音楽で歌うスペクタクルに仕上げて各地で公演しているものである。マリー・ロレ、パピノー、アカディア、ルイ・リエルなど歴史上の人物たちの感情を音楽性豊かに表現する。合間の語りが絶妙で、グループを主宰するAlexandre Belliardの強いケベックなまりが民族感情を盛り上げているように思った。

(次ページへ続く)



Mois de la francophonie初日レセプションにて。左からDesgagné CFA代表、Fournier大臣、(一人おいて)Labeaumeケベック市長。

● 本号の内容 ●

小松会員によるケベック便り「ケベックのフランコフォニー」・・・1 / AJEQ研究会 (12月・3月) 発表要旨・・・2 / 会員による新刊紹介・・・7 / 編集後記・・・10

ラヴァル大学では私の滞在2週目が Semester 真中の読書週で授業がなく、学内は閑散となったが、この週を利用して二日間にわたり言語教育学の学会が開催され、私もいくつかの発表を聞くことができた。なかでも印象に残ったのは、ケベコワの言語規範、とくに発音モデルに関する研究発表である。かつてはフランスのフランス語が“正統”と考えられた時代もあったが、現在のケベコワの多くには軽い地元なまりのある発音（ラジオカナダモデル）を自分たちの言語規範と考える傾向が強まっているとの話だった。

私の滞在中にはモンREALで州政府の教育分野の予算削減に反対する学生らによる大規模デモが起こり、TV5 MondeやRadio Canadaで報道されていた。また昨年末からAIEQ (Association Internationale des Études Québécoises)の予算削減と改革のニュースには不安を感じていたところだった。しかし今回現地で出会った人々の熱い語りは、時局の暗い雰囲気吹き飛ばしてくれた。

思えばケベック州がフランコフォニーについて果たしている貢献には多大なものがある。たとえば、上述のケベックでのフランコフォニー祭の主催者であるCFAは2008年のケベック400周年を記念して創設された組織で、南北アメリカ大陸に広がるフランコフォニーの中心としてケベックがその推進役を担おうという意気込みの表れである。今回の緊縮予算により政府からCFAへの助成金も3分の2に減額となったそうである。が、Desgagné代表はこの件についての私の質問に対して、州財政の健全化のためには予算削減もやむないとしてネガティブな様子は一切見せず、あくまで前向きな姿勢であった。ちなみに今年のフランコフォニー祭で披露されたCFA作成のビデオをYou tube上で見るできるので紹介

しておきたい。La francophonie des Amériques <https://www.youtube.com/watch?v=EaCwfUg0rYw> (このビデオのトランスクリプションを授業用に作成したので、希望の方は小松まで連絡いただきたい。)

調査旅行を終えて帰国すると今度は日本でのフランコフォニー祭に講演者として招かれていたケベックのジャーナリスト、ジャン＝ブノワ・ナドー氏と7年ぶりに再会することができた。彼曰く、フランコフォニーはフランスでは左派からも右派からも（ポリティカルな配慮から）敬遠されがちだが、ケベックでは « extrême-centre »だと。ケベックのフランコフォニー万歳!である。

2014年度第3回AJEQ研究会 2014年12月6日（土）開催 発表要旨

「中国系ケベコワのアイデンティティに関する一考察—ライフステージの移行に着目して」

山口いずみ（津田塾大学）

本報告では、モンREAL市在住の中国系に行った二度のインタビュー調査（2003年と2014年）の結果を比較分析し、アイデンティティの経時的変容という問題を考察した。インタビュー協力者はケベック州生まれ、あるいは幼少期に移住したケベック州住民であり、高等教育を受けている。主要使用言語は問わない。2003年の調査で面談した29人（女性17人、男性12人；21歳～45歳）のうち、11人（女性7人、男性4人；32歳～56歳）と再会でき、中国およびケベックに関する社会・文化的活動や価値に関して、前回とほぼ同様の



聞き取りを行った。そのように収集したデータを分析し、彼らの多元的アイデンティティのあり方を明らかにし、前回の結果と比較検討した。ここ10年間で経験したライフステージの移行（職業人としてのキャリアの蓄積、独身期から家庭形成期・育児期へ、等）に伴い、彼らのアイデンティティも何らかの変化を遂げたのだろうか。

3人のインタビュー協力者（A氏、B氏、C氏とする）に際立った変化を確認できた。A氏（37歳女性）は、以前と同様に「中国系であること」を自然な事実として受け入れているものの、クリスチャンとしての事実や価値がより一層前面化している。クリスチャンというアイデンティティから、ケベック社会への帰属を語るようになった。

B氏（39歳男性）は、「中国系であること」に以前は非常に高い関心を持ち、中国系アソシエーションなどを通じて積極的に他の中国系と交流していたが、いまや中国系との接点はほとんどない。日本人女性と結婚し、子供が2人誕生した彼の家庭には、日本製品があふれ、「日本的しつけ」が実践され、日本語が話されているが、こうした点に関して彼は何の不満ももっていない。自身のアイデンティティを問うと「中国系」と即答するが、子供に継承したいアイデンティティや価値を語る際、「中国的」、「ケベック的」と形容することを拒むようになった。

C氏（32歳男性）も中国系との交友関係は激減し、中国文化への関心も低くなった。以前は中国系アイデンティティを保持することの重要性を頻繁に指摘していたが、現在はそのような言及はほとんどない。子供の言語力について語る際、言語の実利的側面を重視し、



第3回研究会で発表する山口会員（右手奥）

中国語力よりも英語力の育成を強調する。また、ケベック社会はエスニック出自を超えた連帯、すなわち普遍的価値に基づいた諸個人間の連帯に依拠するべきであると主張する。自らの被差別経験について、前回は「中国系であること」と結びつけていたのに対し、今回は「アングロフォンであること」と結びつけていた。

3人は共通して普遍主義的傾向を強めていた。エスニック・マイノリティはエスニック・アイデンティティを固持しているといった思い込みを反証する結果と言える。それは、異質性を価値づける「間文化主義」社会であることが普遍主義の浸透を促しているという、ある種のパラドックスを示唆しているのかもしれない。中国系アイデンティティとして何が継承されていくのかをより深く追究することが、この問題を理解する手がかりになるだろう。

【参考文献】

Yamaguchi, Izumi. 2009. *Vivre la différence : intégration identitaire chez des Montréalais d'origine chinoise*, thèse de doctorat, Université Laval.

2014年度第4回AJEQ研究会
2015年3月28日(土)開催
発表要旨

【研究発表1】

「ケベック文学における主権と間文化主義の表象～教育現場からの文学論～」

スティーブ・コルベイユ (静岡大学)

60年代から、ケベック教育制度はカリキュラムや教育法に対する繰り返す論争と改革の悪循環に陥っている。最も重要な社会的役割を担う学校をめぐる議論が起こることは健全なことだが、教員、生徒、両親、そして住民全体の不満に帰結する場合は不健全だと言わざるを得ない。当然、時代と共に新しい課題が生じ、教育もそれに適応して進化する必要はある。近年、最も目立つのは、インターネットをはじめとする新技術の影響で学習方法と生徒の学習態度が加速的に変化していることである。又、ケベックでは、少子化問題を背景に、ニューカマーを積極的に受け入れる社会になったことによって教育制度もその環境に適応せざるを得ない。



第4回AJEQ研究会の様子
(発表者は山出会員)



発表では、ケベックとフランスの教育現場の違いが、教育をテーマにした上記2つの映画を通して比較された。

左：ケベック映画『ぼくたちのムッシュ・ラザール』(Monsieur Lazhar) フィリップ・ファラルドー監督、2011年。

右：フランス映画『スカートの日』(La journée de la jupe) ジャン=ポール・リレンフェルド監督、2008年。

しかし、まだケベックでは新課題どころか、「静かなる革命」(révolution tranquille)以来残る問題に対応する理想的な方法が見つからず、「解決不能」のレッテルが教育制度に張り付けられている。

本発表では、中・高校とシーゼップ(CÉGEP)におけるフランス語と文学教育の現状を分析し、不満の原因を明確にした。そのために、カリキュラムと現場の状況を比較後、ケベック文学が学校でよく読まれているという第一印象を再検証し、フランス語とケベック文学の社会的役割を考察した。また、教育問題を描写した映画と文学作品を分析し、これまでどのように表象されたかを明らかにした。映画作品は特に、フィリップ・ファラルドー監督(1968-)の『ぼくたちのムッシュ・ラザール』を取り上げ、新教育制度におけるフランス語と文学教育に対する不安と不満を説明した。



さらに、ケベックの歴史と特徴を考察しながら言葉と文学について論じたケベック作家として、オクターブ・クレマジー（1827年-1879年）とガストン・ミロン（1928年-1996年）を取り上げ、ケベックの人がフランス語、フランス文学とケベック文学についての観点から再び考える必要があるかを提案した。特に、ミロンのlangue maternelleとlangue nataleの区別を説明し、フランス語に対する新しい考え方がない限り、ケベック文学を正しく教えられないことを強調した。

本発表の大きなキーワードは「主権」(souveraineté)であった。これはケベック社会とその政治を理解するための重要な言葉であるが、今回は独立運動との関係を表す言葉というよりも、ケベック文学と世界観を明確にする概念として取り上げた。そのために、カトリーヌ・マブリカキスの作品に登場するケベック文学に対する考え方を説明した。最後に、「移動文学」(littérature migrante)と間文化主義 (interculturalisme)を重視する教育制度の可能性に迫った。

【おすすめ文献】

Rancière, Jacques. *Le maître ignorant*, (『無知教師』) Paris, Fait et cause, 2004.

Miron, Gaston. *Un long chemin, prose 1953-1996*, (『長い道』) Montréal, l'Hexagon, 2004.

Mavrikakis, Catherine. *Condamner à mort. Le meurtre et la loi à l'écran*, (『死刑囚。メディアにおける殺人と法律の表象』) Montréal, Les Presses de l'Université de Montréal, 2005.

_____. *Les derniers jours de Smokey Nelson*, (『スモーキー・ネルソンのラストデイズ』) Paris, Sabine Wespieser, 2012.

【研究発表2】

「ドキュメンタリードラマに見るケベック移民のアイデンティティ形成過程
—Hejer Charf監督の『越境する人々』
(*Les passeurs*, 2003)を例に—

山出裕子 (明治大学)



Hejer Charf監督
『越境する人々』
(*Les passeurs*, 2003)の
DVDジャケット。

本発表では、アルジェリアからケベックに移民した女性ドキュメンタリー映画監督Hejer Charfが2003年に制作した『越境する人々』(*Les passeurs*)について、以下の3つの点に注目して分析を行った。(1) アラブ系女性移民がケベックの伝統的映画手法であるシネマ・ヴェリテ (ダイレクト・シネマ)を用いた映画を制作していること。(2) この作品でインタビューを受けている移民のアイデンティティについて。(3) この作品のタイトル『越境する人々』の意味について。

(1) この作品は1964年にケベック人映画監督である Gilles Groulx によって制作された『袋の中の猫』(*Le chat dans le sac*)を、現代のケベックに沿うように設定や登場人物を変えながら「作り直し」(recréation)をした作品であるといえる。『袋の中の猫』とは、1964年のモントリオール国際映画祭でグランプリを受賞した作品であり、シネマ・ヴェリテの手法を用い、ハンドカメラ一つで撮影が行われていることが大きな特徴である。フィクション作品であるが、主人公の名前 (Claude と Barbara)は俳優の本名を使っており、主人公の二人がカメラに向かって、自分自身について語る場面から作品が始まっている。



Gilles Groulx監督『袋の中の猫』(Le chat dans le sac, 1964)の一場面。写真は主人公の一人のClaude。

Charf監督の作品では、Groulx監督のフィクション作品を模倣したかのように、主人公(この作品では4人)のケベック人青年たちが自己紹介する場面から始まる。しかし、Charf監督の作品では、4人の主人公は「マイノリティ」(エスニックマイノリティ、または性的マイノリティ)である。つまりこの作品は、1960年代という変革期を描いたケベックの伝統的な作品をもとに、その40年後に訪れた「マイノリティ社会」であるケベックの姿を描いているのである。このことは、かつてはフランス系ケベック人によって作り出されていたケベックの文化が、今やマイノリティたちの手によって再生されることにより、新たな特徴が作り出されていることを象徴的に示していると言える。

(2) この作品は、DVDジャケットの裏面によれば「Docudorama」(ドキュメンタリードラマ)であるとされている。この手法は、フィクションを基調としながら、ドキュメンタリーの要素が挿入されるものである。Charf監督の作品では、実際にケベックに生きる様々な民族的背景を持つ人々へのインタビュー(ドキュメンタリー)が、フィクションに挿入されている。その民族的背景とは、近年、ケベック(特にモンリオール)で増えている、ハイチ系、アジア系(中国系、ラオス系、インド系)、アラブ系などであり、彼らがどのようにアイデンティティを構築しているのかが、克明に描かれている。

インタビュー部分のうち、特にラオス系の男性とインド系の女性へのインタビューでは、外見上はアジア系でありながら、いずれもフランス語を流暢に話し、自分たちがケベック人の

アイデンティティを持っていることをはっきりと述べている。その根拠としては、自分たちがケベック訛のフランス語を話すことや、ケベックのポピュラーカルチャーや地理に詳しいことなどをあげている。このことは、ケベックが推し進めてきたケベックの言語政策や、近年進めている間文化主義の教育を受けた世代では、どのような民族的背景を持っていても、ケベック人としてのアイデンティティを持つことが可能であることを明らかにしている。

(3) この作品のオリジナルタイトルは、「Les passeurs=通過(passer)する人々」であり、この作品の場合、通過するものは国と国や文化と文化の間の境界であることから、日本語訳を『越境する人々』とした。このタイトルが示唆するように、この作品の特にドキュメンタリーの部分に登場する人々は、ケベックと母国やケベック文化と母国文化の間の境界を越え、ケベック人としてのアイデンティティを構築していることが、この作品から見て取れる。

一方、英系カナダのAnne-Marie Nakagawa監督によって2004年に制作されたドキュメンタリー映画*Between : Living in the hyphen*という作品がある。この作品でも、様々な民族的背景を持つカナダ人が英語でインタビューに答えているが、彼らは自分がカナダ人であるのかどうか常に自問している。というのは、彼らは〇〇系カナダ人としてのアイデンティティしか持つことが出来ず、常にハイフンの上に生きているように感じているのである。



Anne-Marie Nakagawa監督作品 *Between : Living in the Hyphen* (2004)のDVDジャケット。同作品はONFホームページより入手可能。<http://www.onf.ca>

AJEQ会員による新刊紹介

【新刊紹介1】

『マルチナショナル連邦制——不確実性の時代のナショナル・マイノリティ』アラン＝G・ガニョン著、丹羽卓訳（彩流社、2015年3月、3000円＋税）



本書は*L'Âge des incertitudes : essais sur le fédéralisme et la diversité nationale*, Québec, Les Presses de l'Université Laval, 2011の翻訳である。これは、3年前に翻訳出版したイアコヴィーノとの共著『マルチナショナリズム——ケベックとカナダ・連邦制・シティズンシップ』（丹羽・古地・柳原訳、彩流社）に続くものである。今回の邦題はかなり思い切って原題を改変したわけだが、明らかに内容的に両者は継続しており、それを明示的に表すためにそうした。

カナダで消えることのない「ケベック問題」——英語系カナダとケベックの間にある軋轢——がどのようなものであるかをケベック側から論じ、カナダがめざす均質な国民国家に代わるマルチナショナリズムとはどのような理念なのかを示したのが前著『マルチナショナリズム』である。それを踏まえてさらに視野を拡げ、ケベックだけでなく、同じような立場にあるナショナル・マイノリティ——特にスペインのカタルーニャやイギリスのスコットランド——の問題も考察することを通して、マルチナショナル連邦制のあるべき姿とその政治理論的根拠を、本書は明らかにしている。その概要は次の様である。

英系カナダのマイノリティたちが、「ハイフンで繋がれた」アイデンティティしか構築できないのが、カナダ連邦政府が文化政策として掲げている「多文化主義」のためであることは、インタビューを受けている人の多くが認めている。対照的に、今回紹介したCharf監督の作品でインタビューを受けたケベックの移民たちは、様々な境界をpasserし、その間にとどまることなく自分たちが「ケベック人である」と明言している。これは、ケベックの「間文化主義」によって作られる文化的特徴と、カナダの「多文化主義」によるそれとの違いを明らかにしていると考えられ、大変に興味深い。

今回は、数年前にモントリオールを訪れ、アラブ系女性詩人であるNadine Ltaif氏から「日本でのケベック研究に役立ててほしい」といって頂いた映像資料の考察について発表を行った。この資料分析によって得られた成果を、専門分野である女性移民文学の分析やその研究発表に反映させていきたい。

【参考資料（映像）】

Charf, Hejer. *Les passeurs*, Montréal, Nadja Production, 2003.

Groulx, Gilles. *Le chat dans le sac*, Montréal, ONF, 1964.

Nakagawa, Anne-Marie. *Between : Living in the Hyphen*, Montréal, ONF, 2004.

●AJEQ 研究会について

AJEQ では、ケベックに関する研究成果を共有する場として、年に4回研究会を開催しています。非会員でも、研究会に参加することは可能ですので、ケベックに興味のある方は、是非、ご参加ください。

現在、7月4日（土）開催予定のAJEQ研究会での発表者を募集しています。発表をご希望の方は、5月23日（土）までに、企画委員会（企画委員長補佐：山出yamadey@meiji.ac.jp）までお知らせ下さい

第1章では、カナダとケベックが取り上げられ、個人権に基づく連邦制モデルと集団権に基づく連邦制モデルが言語政策を通して比較される。そして言語を巡るケベックの戦いが、カナダではニュー・ブランズウィックのアカディア人やヌナヴトのイヌイットに、カナダ外ではカタルーニャ人などに大きな影響を与えたことが示される。

第2章では、グローバリゼーションの進展がナショナル・マイノリティの要求への抑制の口実として利用されていることへの批判が展開される。それは、国家の目的の中心を経済に据え、言語や文化を軽視する態度への批判である。そして、多元性に基づくシティズンシップ体制を国家が認めることの重要さが論じられている。

第3章では、シティズンシップ体制が論じられ、特に非公式憲法と能動的シティズンシップに焦点があてられる。前書ではケベックが独自の憲法を持つべきであるとの主張がなされていたが、本書ではむしろ非公式憲法の柔軟性の方が推奨され、ケベックはすでにそれを持っているのであるから、次の課題はそれをどうやって連邦政府に認めさせるかであるとされ、そのための戦略も提示されている。

第4章では、マルチナショナル連邦制の中の自治の問題に取り組み、国民国家内のナショナル・マイノリティを解放しエンパワーできる自治、その理想がどのようなものかを明らかにしようとする。ところが実際には、カナダ連邦政府はケベックをエンパワーするどころか、それを抑圧しようとしているという批判がなされる。

第5章では、マルチナショナル連邦制は、テイラーの承認の政治を当然の前提として、エンパワーメントの政治を目指すべきだとの主張がなされる。しかし、現実の国際社会はナショナル・マイノリティのエンパワーメントという点で逆行しており、マルチナショナル連邦制こそがその打開策だと主張されるのである。

第6章では、マルチナショナル連邦制の理論的裏付けが、14世紀にまで遡って展開され、互惠・相互性と信頼に基礎を置く連邦文化形成の必要性が説かれる。そしてそのヒントを北米先住民の実践に求めている。通常の承認が、上位集団が下位集団を承認するという上下関係を前提になされるのに対して、対等なパートナーが相互に承認を行うという、承認の政治より一歩進んだ姿がここでは追求されるのである。

最終章では、マジョリティ・ネイションがマイノリティ・ネイションの忠誠を獲得するにはそのエンパワーメントこそが重要だが、そのためにはどうすればいいかと問うている。著者はそのために次の三つの原理を提示する。(1) マジョリティ・ネイションは行き過ぎた行為を避け、バランスのとれた中庸の道を探らなければならない。(2) ナショナル・マイノリティの尊厳が尊重されなければならない。その意思が無視されるようなことではいけない。(3) マイノリティ・ネイションの将来は、どれだけ移住民を喜んで受け入れられるかにかかっている。彼らを周辺に追いやるのではなく、全市民を包摂し、その積極的な参加を促すような社会を築かなければならない。

2014年は、原書が出版された当時予告されていたスコットランド独立を問う住民投票が実施され、カタルーニャでもそれに呼応するかのよう独立の機運が盛り上がった年であった。御承知のように、どちらの場合も独立への道は開けられなかったわけだが、その地の人々の強い意志は世界中に明白に示された。国民国家が揺らぎ、各国内のナショナル・マイノリティの主張が強まっているこの時に、本書は多くの点で私たちを啓発してくれると思う。そして、この翻訳を終える頃、私の頭にしばしば去来したのは沖縄の問題である、とだけ付け加えておきたい。

(丹羽 卓)



【新刊紹介2】

『甘い漂流』（ダニー・ラフェリエール
著、小倉和子訳、藤原書店、2014年8月、
2,800円＋税）



2011年9月末、日本ケベック学会との共催で開催されたアジア・フランコフォン大学（UNIFA）のメイン・ゲストとして初来日したダニー・ラフェリエールを成田空港まで迎えに行き、都心に向かう車中でのことだった。幾分緊張しながら、初対面のラフェリエールに出版されたばかりの拙訳『帰還の謎』（藤原書店）を手渡し、刊行までの経緯などを話していると、突然「*Chronique de la dérive douce*はもう読みましたか？」と訊ねられた。

1994年にvlb éditeurから初版が発行されたその本は、非常に短い詩篇を集めた140頁にも満たないもので、表紙の全面を飾る眼光鋭い孤独そうな青年の写真（邦訳の裏表紙参照）が強烈な印象を留めていた以外、当時は正直言って、私の中ではそれほど重要な作品という位置づけではなかった。ところがラフェリエールはそのとき、この作品を書き直しているところなので、できあがったらぜひ読んでほしい、と言った。

後日、あらためて読み返してみても、彼がこの本にこだわる理由がよく分かる気がした。そこに描かれているのは、ハイチの独裁政権から追われて、1976年夏、オリンピックに湧くモンREALに命からがら逃げてきたラフェリエール自身によく似た青年である。初めは頼る人もなく、衣食住にも事欠く浮浪者同然の生活を余儀なくされながらも、「自由」を得た若者はよそ者の眼で北米の大都会を観察し、1日1句ずつ俳句を詠むように短詩に書き留めていく。芭蕉の影響も感じられる366篇（この年は閏年）はさながら都会版「漂泊日記」といったところだ。

『帰還の謎』が2009年にメディスス賞を受賞して話題になると、帰郷について語ったからには、到着についても語りなおさねば、と思っただけらしい。ナイポールの同題の小説がなければ『到着の謎』というタイトルになってもおかしくなかった改訂版は2012年初めに出版されるが、ページ数は約1.5倍になり、『帰還の謎』と対をなすべく長詩や散文の部分も増えている。モンREAL到着から18年後に記憶をたよりに綴った初版を、さらに18年後に書き改めた計算になる。その間に磨きがかかった観察眼と、幼児期に祖母のもとで培われた持ち前の抒情性が共存する独特の文体で、70年代のモンREALの風俗が鋭く切り取られ、ユーモラスな「年代記chronique」が編まれる。『ニグロと疲れないでセックスする方法』（立花英裕訳、藤原書店、2012年）とほとんど同じ時期、同じ場所を描いていながら、まったく異なる作風の中にラフェリエールの不思議な二面性がうかがえる。まずはみなさんに実際の作品を手にとってみていただきたい。2013年暮れにハイチ人としても、ケベック人としても、またカナダ人としても初めてアカデミー・フランセーズ会員に選出されたこの作家の原点に触れることになるだろう。

（小倉和子）

AJEQからのお知らせ

【2015年度「小畑ケベック研究奨励賞」推薦受付】

小畑ケベック研究奨励賞は日本とケベック州との学術交流の促進を目的として、日本ケベック学会がケベック州政府の協力を得て、新進の研究者の優れた研究プロジェクトおよび論文等の業績にたいして授与するものです。この賞は2名に授与され、賞金16万円がそれぞれの受賞者に贈られます。推薦受付は2015年5月25日（必着）までです。

【2015年度全国大会「自由論題」報告募集】

2015年度のAJEQ大会は、10月3日（土曜日）に跡見学園女子大学（文京キャンパス）にて開催されます。企画委員会では、「自由論題」セッションでの研究報告者を募集しています。報告ご希望の方は、企画委員長および補佐までお知らせください。なお、応募締め切りは2015年5月31日となっております。

※以上2件の公募の詳細につきましては、AJEQホームページの「活動報告」（<http://www.ajeqsite.org/katsudo.html>）をご覧ください。

- 本号1ページ目の背景写真「ケベック市内の様子」（小松祐子会員撮影）



●編集後記●

例年、AJEQニューズレターの春号は3月に発行されていたのですが、諸事情により発行が遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。しかしながら、新年度になってからの発行であったため、AJEQの活動の様々な情報（奨励賞推薦受付や大会での研究発表募集、研究会発表者の募集など）を掲載することが出来、会員の皆様に有用な情報をまとめてお知らせすることが出来たことは幸いであつたと思います。これからも、会員の皆様のケベック研究のお役にたてるような媒体となるよう、工夫を凝らしていきたいと思ひます。

最後になりましたが、年度初めの大変お忙しい中、ご寄稿いただきました執筆者の方々に、心よりお礼申し上げます。

日本ケベック学会（2015年5月現在）

●主要役員

小倉和子（会長）
立花英裕（副会長）
小松祐子（副会長）
伊達聖伸（副会長）

●広報委員

宮尾尊弘
小松祐子
山出裕子
大石太郎
C・ドゥロンジェ
S・コルベイユ

（顧問・ケベック州
政府在日事務所代表）

AJEQニューズレター
年3回発行
発行人・小倉和子
編集人・山出裕子

